

初年兵の教育も次第に進み十六年七月を迎えたころ、関連軍特別演習のもとに予備役召集兵が入隊してきた。初年兵に注意すると予備役兵から、逆に注意され、時には制裁を受けた。なんと我々は不運なめぐりあわせかながいても致し方なかったわけである。

真珠湾攻撃があり孫呉も風雲急を告げ、あわただしい出陣にそなえての訓練は、毎日きびしくつづいた。

昭和十七年春一月がおとづれ、三年兵は去り、再度初年兵を迎えた。一月下旬から二月上旬にかけて冬季実弾大演習がおこなわれ、野営をして五、六日間だった。雪のなか、昼夜通しての行軍もあり疲労と不眠で隊後に落ちる者、ひどい凍傷で運ばれる者が続出して筆舌につくしがたい苦痛であった。

最も寒さのきびしい時期で、おそらく明け六つ（午前六時）前後は零下五十度くらいの日もあったろう。今なお忘れたい苦しかった思い出がある。南方では戦闘が次第に不利になっていた。生命の危険こそない国境警備であったが、よくも雪と氷、きびしい寒さ、軍律にたえてご奉公したと自負している。

時は流れ十八年四月、内地勤務を命ぜられ、同月十四日、原隊東部十三部隊に転属、十六日現役満期除隊した。

鉄道連隊従軍記

愛知県 渡会 美尾次

昭和十六年六月赤紙がついに来る。千葉県津田沼町鉄道第二連隊へ入隊。この年は雨が多く、今生の分かれになるかも知れぬと武運長久祈願のため、豊川稲荷と一宮砥賀神社へかける。黒川の中田付近は水で通れない状態であり、入隊途中の河川に流木や家屋流失など、その惨状は目をおおうものがあつたが、つつがなく入隊することが出来た。

十日ほどの宮内生活のちに出動命令がくだり列車の人となる。しかし、どこへ行くのか、鎧戸をしめたままなので外部との接触も出来ず不安であった。豊橋通過の際、出動の件を葉書で家庭へ知らせた。

列車は神戸へ着く。雨のなか、港で積荷作業を終了し、

船上の人となる。敵の目をさけるため船底につめられる。一万屯の巨船のなかのうだる暑さにへいこう、加えて玄海のうねり、ほとんど兵隊たちは船酔いに苦しみ食事をとる者は五、六人しかいない状態であった。

敵襲も受けず大連港へ着く。ここでしばらくぶりの入浴をし、あかを落した。それから一昼夜かかってハルビン鉄道連隊倉庫に落ち着く。今までの気苦労と長途の疲れ及び気候の変化で病人が続出、しばらく駐屯を余儀なくされ、およそ三か月後に北上と決定した。北の守り関東軍のさん下にはいる。

二昼夜列車にゆられ黒龍江省山神府へ着く。途中、満州国調査団リットン報告書を想起し、むべなるかなと思いい、広い満州をしのぶ。ここで鉄道新線建設のため、雨のなか、苦力たちと一緒に昼夜の土工作业をする。しながら作業ははかどらず、軍司令官よりお叱りを受ける。分隊長以上が集合しなにかよい考えはないかと相談する。そこで私が日本人の気性では、ざるざる仕事するよりも請負作業にし早く終了したら休暇をあたえるようにすればと進言したところ採用され、工事は順調にはか

どり司令官よりおほめにあづかった。

敷設も終り、各分隊ごとに駅勤務につく、列車の運転、駅勤務等、私は列車長勤務となり、まもなく運転司令室勤務となる。運転命令を出すには、満州新線規定を全部おぼえなければ駄目なので、ずいぶん苦労してようやく覚えたころ、中隊長命令で大連鉄道教育掛を命じられ、満鉄大連鉄道工場で三年間特殊教育の指導にあたった。

そのころには大東亜戦争利あらず、大連にも空襲が度々あり、旅大地区防衛隊が結成され、旅大地区司令官の指揮下にはいり、重機関銃及び軽機も渡され、だんだんとあわただしくなった。

我々にも引揚命令がでたが、派遣隊長はおらず、二百五十人いる兵隊の長となっていたため、戦死者の遺骨の郷里への送付等後始末をつけていた。大陸鉄道司令部へでかけ列車の配車をお願いしたところ、「あんたたちで列車を占領して乗車して下さい」とのこと。兵に着剣させ車を占拠、ハルビンへ帰隊し原隊復帰となる。しばらくすると本土決戦にそなえるため九州へ派遣となり、上

下二段の貨車で一路釜山へ向かう。釜山でしばらく乗船待ちになる。すでに敵潜水艦が出没し危険なため、毎日遭難にそなえ訓練する。

ほどなく乗船、五島列島を南下、佐世保港へ着き、反転北上して博多港へ上陸する。その夜空襲にあうも被害なし。そこから長崎・志佐・熊本方面へ南下し、機関車防護の作業にあたる。伊万里駅付近の作業では爆弾の破片が落下しあわやの事態があったが、お陰で被害なし。

いよいよ戦局は悪化、食糧も各隊ごとに自給せよとの命。若い給与担当の下士官では買い出しもままならず、よく依頼されて買い出しに各地へ出張したものです。

かくしているうちに八月十五日重大放送があると、ラジオに耳をかたむけると陛下の大戦終結のお言葉、ポツダム宣言全面受け入れが放送されました。

その時のいつわざる心境を申し述べると、やれやれこれで助かったと思う反面、いよいよ敗戦、この先どうなるかと複雑な気持ちだった。このとき九州方面司令官より、われわれはあくまで戦うとの命が出た。我々は各地鉄道線路寸断のため列車は不通。当局の依頼により復旧

作業に従事したが兵たちは上官の命令には服従せず、なだめるのが一番苦勞でした。いろいろとあったが、復員時は列車を特別に仕立ててくれて無事帰ることが出来た。

その時、いろいろな物品をわかちあったが、蚊帳も四つ五つに切り分配する始末、今考えるとナンセンスだが、以上は応召より終戦までの概略です。

戦争中一番の恐怖は、佐世保の空襲で市は焼野原、もちろん鉄道も破壊された。夜間照明灯をつけ復旧作業中、空襲警報が出たが、隊長は避難命令を出さずに我々に作業続行を命ずる。私がここで死ねば大死だということ、隊長は激怒し「犬死とはなにごとぞ」と、私は恐ろしくなり状況視察してくるから待避させると兵二人をつけて町へ出た。

町は火の海になっており、時折、焼夷弾の爆発と青い火がちよろちよろとし、あまりよい気持ちではなかった。隣の町の空襲の時はグラマンやロッキードが五百機あまりの爆撃で空は暗くなり、百雷の一時におちるような状態に思わず小川にかかっていた土橋のしたへと飛び

込んでしまい、あとで苦笑した。

私の軍隊経験

愛知県 寺西公男

軍隊とは何であったのか。私は今この投稿を書くにあたって、静かに五〇年前を思い起こしている。徴兵検査、それは憲法に定められた国民の三大義務、つまり、兵役・納税・教育のなかの兵役の義務により日本男子である限り、必ず検査を受けなければならない義務があった。国のさきもりとして軍隊にはいるのである。もっとも私は現役志願兵として一年早く軍隊にはいった。「粉骨碎身、身をもって尽忠報国のまことをつくす覚悟であります」郷土の人々に見送られた氏神様の神前でこんな挨拶をし勇躍宮門をくぐったのである。

私は吉林省敦化の部隊に現地入隊した。「酷寒零下三十度」と実にきびしい寒さであった。こんな寒さのなかで初年兵の訓練は言語に絶するきびしいものであった。

訓練ばかりではない。内務班における言語・行動・一挙一動・すべてが古年兵の目のなかにあった。常任座敷の間、ビンタの恐怖にさらされていた。これも国のためと思いついて来たのである。ビンタが国のためになるわけではないのだが、無理やりに自分にそっくり聞かせていた。

私は前述したように現役志願兵として軍隊にはいったのであってどんな苦しみも耐えるのが当然でなくてはならないはずだったが、やはり人の子、なま身である以上、たたかれて痛くない者はない。かわのスリッパで力まかせになぐられたのである。初年兵は一人残らず顔がイビツになったといえはおおげさ過ぎるように思われるが、それはまぎれもない事実であった。

一期間六か月の教育が終ると二期の教育が待っていた。私は重機関銃にまわされた。七月の炎天下六十キロの重機をかついだり、ほふくして引きずる行為はなみ大抵のことではなかった。私は九月になり胸部をわずらい入院した。このため、その年の十一月内地に送還された。十二月の暮、治癒退院して中部二部隊「六連隊」に転属